【研究区分：若手奨励研究】

研究テーマ：新型コロナウイルス感染症対応における DMAT 看護師の看護実践の構造	
研究代表者：保健福祉学部 保健福祉学科 看護学コース 助教 山田裕紀	連絡先：yamaday@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：保健福祉学部 保健福祉学科 看護学コース 教授 岡田淳子	

【研究概要】
今般の新型コロナウイルス感染症対応において、自施設外で活動した DMAT（災害派遣医療チーム）看護師 9 名に半構造化面接を行い、KJ 法で看護実践を構造化した。その結果、【安全の境界を問う一声】【最善を貫く】【活動基盤をつくるコーディネーター】【安全を守る使命】【真摯にアドボケート】【心の痛みに寄り添う】【未経験・未来への対応力】から成る実践構造が明らかとなった。本実践は、感染管理、災害対応、多職種連携および対象者擁護といった多様な専門性を統合しながら展開される実践知として捉えることができる。

【研究内容・成果】

１．研究の背景と目的

従来、日本の DMAT は自然災害の急性期対応を主たる活動としてきたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックにおいては、未知のウイルスが蔓延するクルーズ船や施設クラスターなど、感染症対応の最前線へも派遣された。罹患の恐怖や標準的な感染対策の適用もままならない過酷な現場で、DMAT 看護師は目の前の患者ケアと自身の安全確保の狭間で葛藤を抱えながら、手探りでの対応を迫られていた。本研究は、自然災害を主たる活動の場としてきた DMAT 看護師が、未知の脅威下でどのような臨床判断を行い、実践を展開していたのか、その暗黙知を抽出し体系的に整理（構造化）することを目的とした。

２．研究方法

（１）調査対象とデータ収集

対象者は、COVID-19 の国内持ち込みから市中感染拡大に至る過程で、自施設外に派遣され水際対策やクラスター対応などに従事した DMAT 看護師とし、研究者らの人的ネットワークを活用した目的サンプリングにより研究協力を募った。調査は、2024 年 8 月から 2025 年 1 月に行い、1 回 60 分程度の半構造化面接を実施した。面接には、実践エピソードを網羅的に得るため、災害前・中・後の看護師の役割（Firouzkouhi et al.，2021）を理論的枠組みとしたインタビューガイドを用い、①派遣前や患者接触前の準備性、②医療支援活動中の思考と実践、③活動後の評価や今後の研鑽、④活動全体の総括について語りを得た。

本研究は、研究倫理委員会の承認（第 24MH016 号）を得て実施した。

（２）データ構造化の方法

渾沌としたデータ群の本質をシンボリックに明らかにするため、KJ 法を用いた。逐語録からラベルを作成後、「探検ネット」を作成して全体感と質のバラエティを確認した。その後、多段ピックアップでラベルを精選し、グループ編成（表札づくり）と空間配置を経て図解化・叙述化した。なお、データ構造化の全プロセスにおいて川喜田晶子氏のスーパーバイズを受けた。

３．研究成果

（１）研究対象者の概要

データ収集の結果、9 人目の段階で質のバラエティが出尽くしたと判断し、データ収集を終了した。DMAT 看護師 9 名の看護師経験年数は 24.9±7.51 年、DMAT 経験年数は 11.9±4.59 年であった。9 名全員が DMAT として派遣され（うち 3 名はコーディネーションチーム兼務）、活動の場はクルーズ船内外、行政機関、クラスター施設・医療機関、感染者宿泊施設、感染流行期の被災地など多岐にわたった。

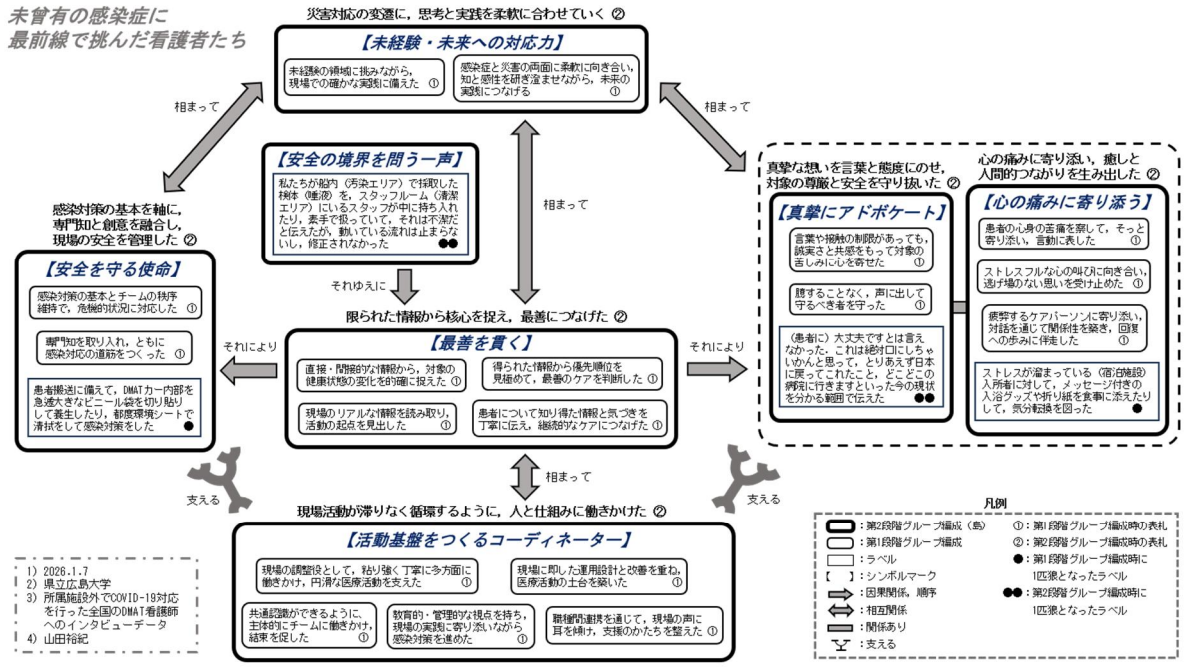


図1．COVID-19対応におけるDMAT看護師の看護実践の構造

図解は，最終統合の2段階目の編成を示し，下位の編成を省略した略図である．また，右中段の2つの島を囲む点線は，関係線が両島に向かっていることを明示するため，便宜上標記した．

（2）看護実践の構造

抽出した 98 枚のラベルから 50 枚を精選し KJ 法を行った結果、7 つの実践（島）で構成される構造が明らかになった（図 1）。

未曾有の感染症に対して誰もが対応を模索し懸命に現場活動する中で、DMAT 看護師は清潔と不潔の曖昧さを鋭く察知し、「それは不潔だ」と【安全の境界を問う一声】を発して周囲に危機感を伝えていた。こうした不確実で緊迫した状況ゆえに、限られた情報から物事の核心を捉え、優先順位を見極めて各活動レベルで【最善を貫く】行為に結びつけていた。現場では、職種間連携を通じてニーズを汲み取り【活動基盤をつくるコーディネーター】として円滑な医療活動の土台を築き、その下支えのもとで専門知と創意工夫を凝らし【安全を守る使命】を果たしていた。また、厳格な隔離や感染対策により物理的・心理的な障壁が存在する中でも対象者へ【真摯にアドボケート】し尊厳と安全を守り抜くとともに、身体面だけでなく【心の痛みに寄り添う】ケアを実践し、人間的なつながりを生み出していた。そして、一連の看護実践を通して得られた知見を次なる災害や感染症対応への備えとして蓄積し、【未経験・未来への対応力】を深化させていた。

（3）考察

本研究で明らかになった 7 つの実践は、それぞれが独立して存在するのではなく、安全の確保、活動基盤の構築、対象者への寄り添い、そして将来への備えへと相互に関連しながら機能していた。したがって、本実践は感染管理、災害対応、多職種連携および対象者擁護といった多様な専門性を統合しながら展開される実践知として捉えることができる。

さらに、未知の感染症という前例のない状況においても、DMAT 看護師は状況を見極めながら柔軟に行動し、経験から得た知見を次なる活動へとつなげていた。こうした特徴は、不確実な状況への適応や学習の継続という観点から、レジリエンスの様相を有する実践として解釈できる可能性がある。

本研究は、COVID-19 対応において DMAT 看護師がどのような実践を行っていたのかを構造的に示した点に意義がある。今後は本知見を基盤として、感染症対応における安全管理について検討を重ね、DMAT 看護師に求められる実践能力をより具体的に明らかにする必要がある。